関連学会印象記

第50回日本胸部外科学会総会

上部一彦*

1997年10月1日から3日に第50回日本胸部外科学会総会が川田志明慶應義塾大学教授を会長として開催された．今回は50回という節目の記念すべき総会であり，学会開催に先立ち「日本胸部外科学会50年の歩み」誌が会員に送付された．この雑誌を長年胸部外科領域で御活躍されている会員の方々は，その歴史と発展を感慨をもってページをめくられたことと思う．会員年数の浅い私も，教科書や文献でお目にかかったことのある先生方の写真をはじめて拝見してその名をさらに印象付けられた．学会会期中も会場内に50年の歩みがパネルで展示されており，その前で足をとめられている先生方も見受けられた．

今回の総会では心臓血管外科分野のうち，主に参加した成人循環器外科領域についての印象を述べてみたい．全体としては，大血管領域の発表が多く，冠動脈および弁膜症に対する低侵襲手術の演題が増えてきたこと，またここ数年の総会に比べビデオが少なかったという印象を受けた．

冠動脈領域では，Minimally Invasive Direct Coronary Artery Bypass（MIDCAB）が一つの大きな話題であった．最近の動脈グラフト多用の多枝バイパスの成績の向上により，話題は重症合併症を有する症例における人工心肺を使用しない冠動脈バイパス術となり，さらに進んで小切開で場合によっては内視鏡も用いるMIDCABに行き着いた感がある．MIDCAB用deviceの性能向上とlearning curveにより成績が良くなっていくことと思われる．MIDCABを施行する施設も増加してきており標準的なバイパス手技になってこよう．現在冠動脈バイパス術の適応はわれわれ外科医ではなく循環器内科医がその決定権を持つようになってきており，「MIDCABでこの部位にこのグラフトで吻合してくれ」というように要求されるようになり，成績が悪ければ手術に回ってこないという事態になってくるかも知れない．しかし冠動脈バイパス術を受ける患者の大多数は多枝病変であり，吻合箇所の点でMIDCABには限界が有るためその適応は限られるであろう．また新しいグラフトとしてのradial arteryの成績が発表されたが，遠隔成績が待たれるところである．

弁膜症の分野では人工弁置換においてもMinimally Invasive Cardiac Surgery（MICS）の演題がみうけられた．MICSにおいてはその定義の問題や，アプローチの仕方にMIDCAB以上に見解の一致をみていないようであった．また弁の形成術の話題も豊富であった．僧帽弁形成術に関しては，九州大学安井先生のMitral Apparatusの演題が興味深かった．このMitral Apparatusなるものは人工腱索の長さを適確に決定できないものかと考案されたもので，発表の中で安井先生の「ある特定の職人技ではなく，だれがやっても同じように良い結果が得られる手術をめざしている」というような旨の発言が非常に印象深かった．大動脈基部再建術に関しては，David法の成績が芳しくないとの発表や，Yacoubによるremodeling法を評価する発表があり，新しい手術法の評価の難しさを改めて感じさせられた．大動脈弁形成術に関する挑戦や，stentless free style valveなど新しい試みの発表もあり，この弁形成や生体材料の分野が現在進行形で実感させられた．

大動脈疾患に関して示説をあわせ多くの発表がなされたが，やはり問題となっているのは胸腹部瘤を含めた胸部下行大動脈瘤の治療方針であろう．腹部諸臓器のみならず特に脊髄保護が心筋保護法のようには確立していないため，今でも試行錯誤

*東京女子医科大学日本心臓血圧研究所循環器外科

Presented by Medical*Online

といっては言い過ぎであるが手探りの状態であることは否めない．この分野の著名な専門家であるDr. Ergin およびDr. Svensson の口演を同時期に聞くことができたのは収穫であった．またステントグラフト内挿術も興味を引く内容であった．大動脈疾患は近年増加傾向にあるだけでなく，その手術手技や補助手段，人工材料の発展が著しく，年々 aggressive な試みが発表されてきており，会場は連日盛況でこの分野に対する関心の高さを示していた．違った見方をすれば，この分野で日常臨床上苦労していることが多いということの反映かも知れない．

その他不整脈や体外循環，人工心臓，先天性心疾患などの分野でも興味深い発表，議論があったようだが残念ながら参加する時間的余裕がなかった．

今回の胸部外科学会総会の印象を述べてきたが，これとは別な意味で参加して注意した点がある．発表内容とは別に，会場設定や運営状況等も参考にさせていただいた．それは来年の第51回胸部外科学会総会が小柳仁会長のもと当教室主催で開催される（於・東京フォーラム）ためである．胸部外科分野の一番大きな学会であるだけにその準備には多大な苦労があったと思われ，次はわれわれの番かと多少の圧力を感じてしまった．

最後にこの記念すべき第50回胸部外科学会総会を成功裏に開催していただいた川田志明会長ならびに慶應義塾大学外科学教室の方々に感謝と敬意を表します．

Presented by Medical*Online